

## 欠席委員からの事前意見

## (1) 指標大型水鳥類の目標設定の考え方について

## &lt;ヒシクイ&gt;

- ・ ヒシクイはここ数年飛来数が増えており、200 羽を超えることもある。
- ・ 斐伊川水系に飛来するヒシクイ個体群は、東日本のものとは渡りルート等が異なると考えられる。いわゆる亜種オオヒシクイ的な集団（タイガ型）と、亜種ヒシクイ的な集団（ツンドラ型）が渡来しているが、東日本の亜種とは異なるようだ。現時点では、明確には分類できていない。
- ・ 近年は、特にツンドラ型が増えているがその理由は不明。
- ・ 不明点が多いため、ヒシクイの目標設定は難しいが、2つのタイプが越冬すると考えると、200 羽と言っても、実態は 100 羽前後の 2つのグループとなる。そして、100 羽前後の個体群の減少リスクは高い。

## &lt;オオハクチョウ&gt;

- ・ コハクチョウと比較して水田よりも水辺や湿地を選好する。オオヒシクイの環境利用に近い。
- ・ 元々飛来数が少ないので、具体的な目標数値の設定については、過去に失われた環境を再生するための目安程度と考える。当面は、神戸川下流部での整備や、コハクチョウの整備に併せた検討などが考えられる。

## (2) 自然再生計画について

## &lt;第 2 章 大型水鳥類の生態と生息環境－ねぐらに求められる機能について（P37, 38）&gt;

- ・ 避難場所が 1 箇所に集中しないことが大事。例えば、宍道湖でマガンが脅威にさらされた時に、斐伊川河口に全てのマガンが逃げ込むのではなく、もう少し上流にも避難できるような場所が必要。

## &lt;第 4 章 自然再生整備計画－保全・再生箇所の抽出について（P. 80 等）&gt;

- ・ 保全・再生箇所の抽出結果について、例えばある種からは「整備適性」、ある種からは「現況保全」という結果が得られた場合の、整備、または保全の考え方について。例えばマガンとヒシクイならば、求められる水面の広がりや見通しの良さの程度については共通である。
- ・ 工事時期の設定は越冬期を避けるべきである。
- ・ モニタリングも必要である。

## &lt;第 4 章 自然再生整備計画－「神戸川境橋上流～神戸堰」（P. 103-104）について&gt;

- ・ この図の通りにマコモを植栽しても、ワンドのような狭い空間にはハクチョウ類は入ってこないのではないか。

## &lt;第 4 章 自然再生整備計画－「斐伊川河口左岸出島地先」（P. 108）について&gt;

- ・ 宍道湖で水草が増えてきたため、ハクチョウ類は、日中、湖岸付近で採食行動している様子を観察

することができる。斐伊川河口でも、ねぐら立ち後、しばらく水草を採食して滞在しているようだ。マガンも、朝、水の中へ顔をつけている行動がみられる。

- ・ 斐伊川河口左岸出島地先においては、全面、砂州ではなく、多様な環境を作って欲しい。マコモの植栽なども良いだろう。
- ・ 穴道湖西岸はそれほど塩分濃度は高くないので、マコモも問題なく生育すると思われる。
- ・ 人の侵入対策も大事だが、天端を歩く人の動きを見えなくする遮蔽も欲しい。

#### ＜その他、自然再生計画に関する事項＞

- ・ 斐伊川本川等では高水敷の掘削が事業メニューとして示されているが、掘削した土はどう扱われるのか。
- ・ 第4章では各河川において整備箇所が示されているが、これらはすべて事業化され、工事が行われるのか、確認させてほしい。

### （3） その他、生態系ネットワーク形成等に関するご意見

#### ＜ツル類について＞

- ・ 採食場所はほぼ水田であるため、河川は、ねぐらや避難場所の整備を主たる目的として検討すればよい。
- ・ ねぐら条件は、ハクチョウ類とは少し異なり、砂地よりも、やや泥地的な環境（干潟、砂泥地、中州など）。そこに、多少なりとも、動物質の食物があると良い。出島地先で目指しているイメージがひとつの解答かもしれない。全くの更地、砂州は、ツル類にとってあまり魅力的ではない可能性がある。
- ・ 当面は、毎年、安定的に越冬することが、目標になるだろう。